

6 貧困・低所得とメンタルヘルス及びその世代的再生産

首都大学東京人文科学研究科教授 稲葉昭英

1 はじめに

ここでは、様々な所得指標とメンタルヘルスの関連、及びその世代的な再生産の有無を検討する。なお、以下の分析は保護者調査票の回答者が父親又は母親である場合（それぞれ義理の父母を含める）に限定している。

2 メンタルヘルス指標の作成

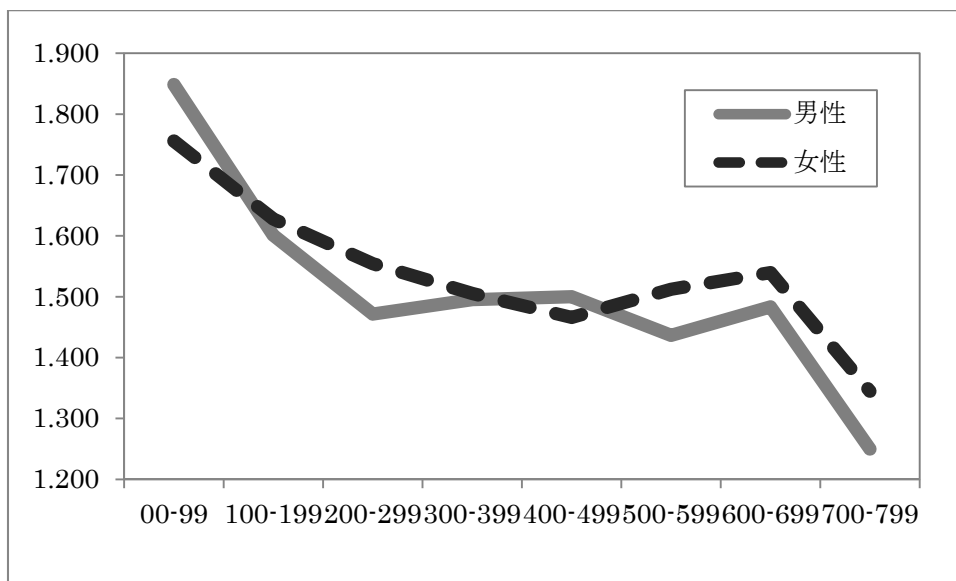
メンタルヘルス指標は、さまざまな概念と対応するが、本調査では心理的な不快な状態である抑うつ（心理的ディストレスとも呼ばれる）を測定している。

項目としてはアメリカにおいて開発された CESD（Center for Epidemiological Studies Depression）から3項目を抽出し、親・子の双方に対して過去1週間の「悲しいと感じたこと」「憂鬱だと感じたこと」「一人ぼっちで寂しいと感じたこと」の経験頻度を4件法で問うことによって、測定がおこなわれている。3項目の関連は中程度であり、単純加算尺度を想定した場合のクロンバックの α 係数は0.706であった。以下では、個人ごとに算出した3項目の平均値を抑うつの指標とする。親の抑うつの平均値は1.56、標準偏差は0.59と分布は正の方向にひずむ。

子どもの抑うつについての3項目のクロンバックの α 係数は0.686と親よりは内的一貫性が低下する。3項目の平均値は1.49、標準偏差は0.58と、平均値は親よりも低いと分布はほぼ同様であった。

3 親の抑うつのパターン

3.1 所得指標との関連



図IV-7-1 性別・等価世帯所得別にみた親の抑うつの平均値

世帯年収（11段階）、等価世帯所得（7段階）をそれぞれ独立変数として平均値のパターンを考察し

たところ、基本的には所得と抑うつは性別にかかわらず負の直線的な関連を示し、低所得層で抑うつが高く、高所得層で抑うつは低い傾向が示された。男女差は示されなかった。

等価世帯所得で見た場合には男性は年収 299 万未満まで、女性は 499 万未満までに負の直線的な関連が示され、それ以降はほとんど差異が示されず、最高所得層である 700～799 万層で再び抑うつが大きく低下していた（図IV-7-1）。世帯年収でいえば 250 万未満、等価世帯所得でいえば 199 万未満が抑うつの高いグループということになる。

こうした傾向を反映して、男女ともに相対的貧困世帯ほど、生活保護受給世帯ほど、児童扶養手当受給世帯ほど、抑うつが有意に高かった。

3.2 その他の世帯・個人属性変数との関連

所得に加えて属性変数、ライフコースに関する変数が抑うつに及ぼす効果を二変数レベルで詳細に検討した上で、最終的に重回帰分析によって検討した（表IV-7-1）。この結果、等価世帯所得が低い者ほど、現在無配偶（ひとり親世帯）の者ほど、中学3年時点で生活が苦しかったと回答している者ほど、中学3年時点で親に口論や争いが絶えなかったものほど、現在の抑うつは高かった。また、中学3年時のひとり親経験は女性の現在の抑うつとは関連が見られないが、男性では現在の抑うつとの低さと関連していた。夫学歴・夫の就業状態を含めたモデル3では、以上の結果のほかに、夫が無職である場合に、夫・妻ともに抑うつが高い傾向が示された（このモデルは、母子世帯の者が含まれないために、モデル1，2とは対象者が異なることに注意）。

表IV-7-1 抑うつを従属変数とした重回帰分析（OLS）の結果

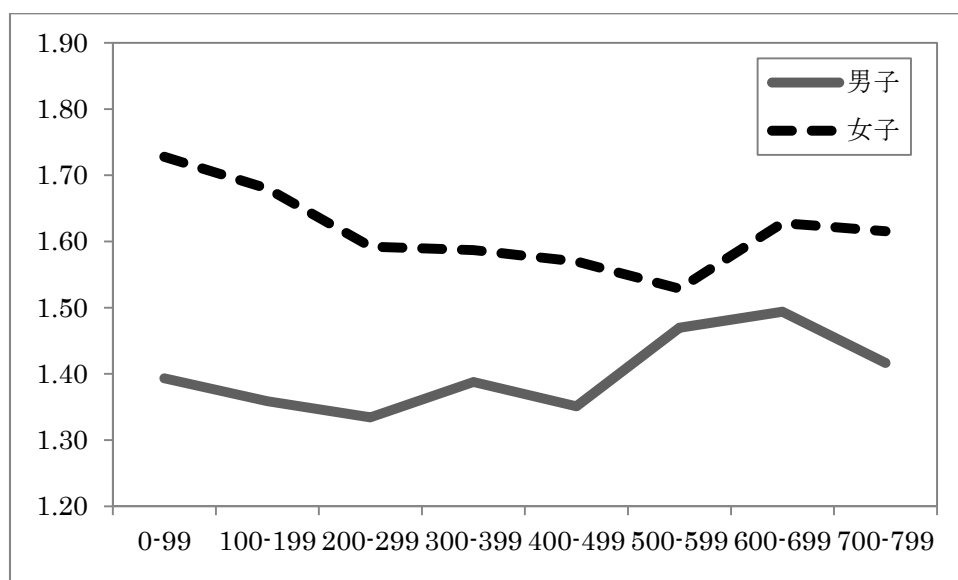
独立変数	モデル1		モデル2		モデル3	
	β	SE	β	SE	β	SE
切片	1.720***	.033	1.718***	.034	1.992***	.115
男性(=1)	-.036	.030	-.018	.031	-.024	.033
等価世帯所得（百万円）	-.023***	.007	-.023***	.007	-.019*	.008
有配偶(=1)	-.174***	.033	-.174***	.033	-.223**	.084
夫大卒以上(=1)					-.002	.025
夫有職(=1)					-.234**	.082
中3時生活苦(=1)	.127***	.023	.128***	.023	.118***	.025
中3時親口論絶えず(=1)	.160***	.032	.159***	.032	.142***	.035
中3時ひとり親(=1)			.026	.044	-.039	.048
中3時ひとり親×男性			-.259*	.118	-.209	.118
R ²	.044***		.046***		.034*	
N	2974		2974		2533	

注：独立変数はすべてダミー変数。* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ 。SEは標準誤差。

4 子どもの抑うつのパターン

4.1 所得指標との関連

親についての分析とほぼ同様な手順で、子どもの抑うつに影響を与える要因についての分析を行った。所得と抑うつの関連は直接には示されないが、性別が強力な効果を有しており、女子に抑うつが高い。性別にわけると、男子は等価世帯所得と抑うつとの正の関連をしている（ $r = .057$, $p < .05$ ）のに対し、女子は所得と抑うつが負の関連（ $r = -.070$, $p < .01$ ）を示した。男子の結果は予想とは逆の関連であり興味深い。



図IV-7-2 性別・等価所得世帯別にみた子どもの抑うつの平均値

4.2 抑うつと学習態度

つぎに、子どもの抑うつと子どもの学習態度・成績などとの関連を検討してみた。抑うつが高いほど成績が悪く、大学進学可能性が低いと子ども自身によって認識されており、勉強時間も少ない。なお、これらの関連は必ずしも抑うつが原因で成績等が結果とは言い切れないことに注意が必要である。

4.3 世帯・個人属性変数と子どもの抑うつ

子どもの抑うつについて、世帯属性を中心とした様々な変数の効果を分析した。この結果、女子であるほど、親の抑うつが高いほど子どもの抑うつも高く、また女子においては等価世帯所得が低いほど抑うつが高かった。

親子の抑うつの関連は、抑うつが世代的に再生産されるという先行研究^{*}と整合的である。親の抑うつは、出身家庭（祖父母世代）の不安定性や経済状態と関連し、また現在の所得とも関連し、子どもの抑うつとも関連していた。子どもの抑うつは、学習態度や学習成果と負の関連を示していた。欧米の先行研究^{*}では世帯の所得の低さが子どもにとって可能な未来を制約し、無力感を生み出すことで抑うつを高め、そのことが貧困からの脱却を困難にさせることが指摘されている。また、親夫婦の不安定性は子どもの抑うつを高め、子どもの早期の離家と低い学歴達成と関連することも知られている。低い学歴達成は貧困と結びつきやすく、このことは子どもが形成する家族もまた不安定化しやすいことを推測させる。このように、貧困の世代的連鎖は抑うつの世代的連鎖を媒介に生じている可能性がある。

では、抑うつを低める要因はないのだろうか。これについては、「何でも話せる友人がいる」、(父又は母が)「私のことをよくわかっている」場合に、抑うつは減少していた。子どもにとっても対人関係の持つ意味がきわめて大きいことがわかる。

Edin, Kathryn and Rebecca J. Kissane. 2010. Poverty and the American Family: A Decade in Review.

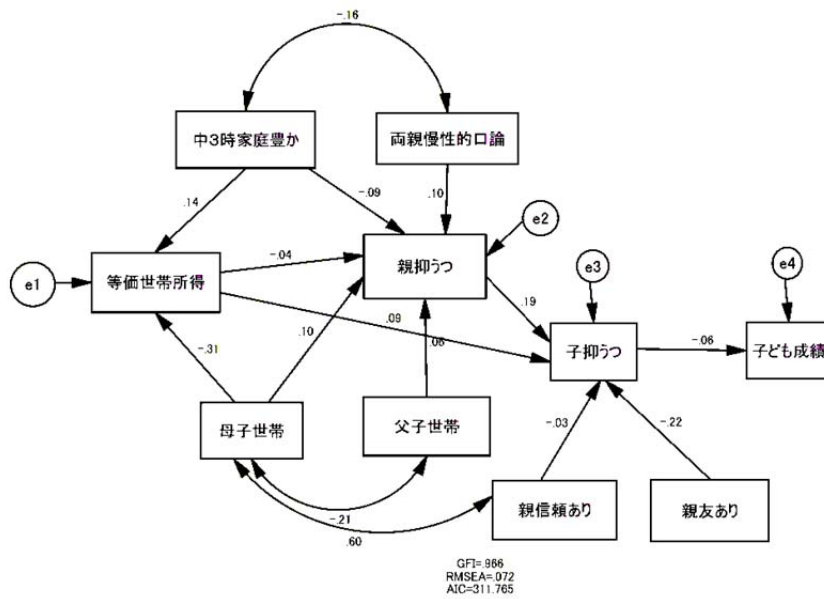
Journal of Marriage and Family, 72(3):460-479.

Fomby, Paula and Andrew J. Cherin, 2007. Family Instability and Child Well-being.

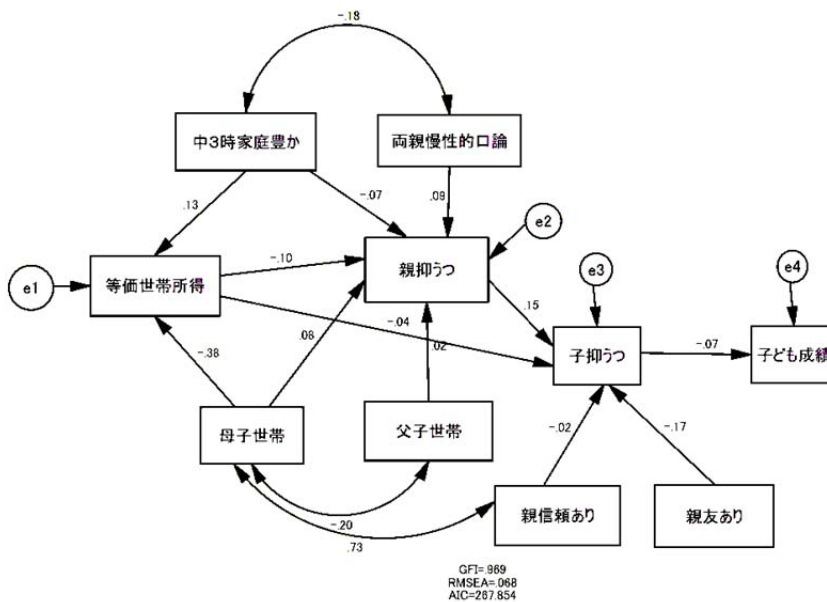
American Sociological Review, 72: 182-204.

5 全体的な分析

以上の考察をもとに、全体的な変数の連関を構造方程式モデルによって推計した。男子 (n=1, 501) についての結果を図IV-7-3、女子(n=1, 371)についての結果を図IV-7-4に示す。



図IV-7-3 全体の変数の連関 (男子)



図IV-7-4 全体の変数の連関 (女子)

男子の結果では、現在の世帯所得（等価世帯所得）と親の抑うつ、「親信頼あり」（子どもにとって「私のことをよくわかってくれる」父親又は母親の有無）と子どもの抑うつの間に関連は示されなかったが、それ以外はすべて有意な関連が示された。回顧法ではあるが祖父母世代の不仲（慢性的口論）や経済状態が親の現在の抑うつと強く関連し、親の抑うつは子どもの抑うつと強く関連していた。また、祖父母世代が豊かだったものほど現在の世帯所得も高く、世帯所得は子どもの抑うつと正の関連を示していた（所得が高いほうが子どものメンタルヘルスが悪い）。抑うつの高さは成績と負の関連を示していた。一方、「何でも話せる」親友の存在は抑うつと強い負の関連を示したが、信頼できる親の有無は子どもの抑うつと関連を示さなかった。

女子の分析結果は、男子と同様に「親信頼あり」の効果は有意ではなかった。このほかに、父子世帯と親の抑うつ、等価世帯所得と子の抑うつには有意な関連が示されなかった。男子との相違は、男子で示された等価世帯所得と子どもの抑うつとの関連が女子では示されていないこと、世帯所得と親の抑うつに負の関連が示されたことであり、それ以外はほぼ傾向は同様であった。

6 要約と結論

全体を通じて、祖父母世代の貧困や夫婦関係が、直接・間接に親のメンタルヘルスに影響を与え、親のメンタルヘルスが子どものメンタルヘルスに影響を与えている様子がうかがえた。

世帯の貧困は直ちに子どもたちのメンタルヘルスを悪化させているわけではなく、親の抑うつを通じての間接的な効果が示された。男子では、むしろ所得が高いものに抑うつが高いという結果が示された。これは、所得が高い層に教育熱心な親が多いことと関連しているのかもしれない。

さらに、「何でも話せる親友」の存在がこうした抑うつ世代的な連鎖を阻止する重要な役割を果たしうることが示唆された。一方で「信頼できる親」の効果は最終的には検出しえず、親は友人の効果を代替しえない。この結果から判断すれば、親との関係以上に「何でも話せる」友人の存在が大きな意味を持っているということになる。

逆に言えば、こうした親友をもたない子どもは様々なストレスに対してきわめて脆弱な存在であるといえる。不登校、引きこもりなどで友人をつくる環境をもたない子たちは、メンタルヘルス上の大きなリスクを負っているといえる。

欧米の研究成果と比較するならば、貧困が子どもに無力感を生み出す、という貧困と子どものメンタルヘルスの間の直接的な関連はここでは希薄であった。父子世帯や母子世帯という家族構造が直ちに子どものメンタルヘルスの差異を生み出しているわけでもなかった。ただ、親同士の関係が子どもに与える影響はわが国でも大きいようだ。この点の分析は十分になしえていないが、貧困・低所得が夫婦関係の不安定性を媒介として、子どものメンタルヘルスに影響を与えている可能性は十分にある。今後、貧困と家族関係、家族関係とメンタルヘルスの関連を検討していく必要があるだろう。